読者のページ

Reader's VIEW

このコーナーでは、今回の特集「小中高連携で変わる英語教育」について、特集でご紹介した以外に、読者の皆さまから寄せられた事例をご紹介します。

小学校編

◎学級担任が主導する外国語活動の授業で、児童が行う英語会話の例示を、担任がパペット人形を相手に行ったところ、そのやりとりが分かりやすく、子どもたちにもスムーズに受け入れられました。（新潟県／Ｈ小学校）

◎前任校は、文部科学省の英語研究に関する事業の拠点校でした。文法を学ばせる際に、「Repeat after me.」を繰り返すだけでは、従来の中学校の授業と同じになってしまいます。そこで、チャンツやゲームなどを工夫して授業を進めていきました。また、『Hi, friends!』はあくまでも資料であると捉え、インストラクターとアイデアを出し合いながら授業を進めるようにしました。（福島県／Ｍ小学校）

◎空き教室を生かして、液晶プロジェクターとコンピュータを常設した「英語活動室」を設け、ＤＶＤなどの利用をしやすくしています。（愛知県／Ｎ小学校）

◎ゲームや歌を多く取り入れたり、カードやタブレット端末を活用したりと工夫しています。また、ＡＬＴにはすべて英語で説明してもらい、学級担任も出来るだけ日本語を使わないように気を付けています。（北海道／Ｃ小学校）

中学校編

◎大学入試レベルの語彙数に対応するため、授業では教科書で文法事項を押さえる前半と、映画やコミック雑誌などの楽しいものに触れさせる後半（前半の文法事項が出ているもの）に分けて展開しています。（鳥取県／Ｙ中学校）

◎校区内の小学校に、本校の英語科教員を学期に１回派遣するなど、小中連携を推進しています。しかし、小学校はスキット（会話）で楽しむことを中心にしているため、「書く」活動が入ってくると途端に難しくなり、単語力に差が付いてくるようです。どう対応するかが、今後の課題です。（鹿児島県／Ｔ中学校）

◎各学期に１回、全学年で、さまざまなスピーキングのテストを実施しています。（北海道／Ｒ中学校）

◎前任校では、とにかく中学１年生から英語での指示を出来るだけ増やしていき、中学３年生ではオールイングリッシュで授業を行っていました。小規模校（全校で６クラス）かつ英語教員が徹底していたことで可能だったと思います。その結果、学力テストでは平均偏差値が６０を超えていました。（福島県／Ｓ中学校）

◎新入生に対して、小学校の卒業時に、本来なら中学校入学後に活用する「英字練習帳」（ペンマンシップ）を渡し、春休み中に大文字と小文字について学習させ、中学校入学時に提出するように求めています。大半の新入生が、その課題はもちろん、巻末の筆記体の部分まで完成して提出しており、非常に成功しています。中１スタートの負担が減り、教員はかなり助かっているようです。（島根県／Ｋ中学校）

◎本校には週２～３日勤務のＡＬＴ（２校兼務）のほかにＮＴ（ネイティブ・ティーチャー）が配置されています。ＮＴは本校職員扱いのため毎日勤務し、ティーム・ティーチングによる英語の授業を各クラス月２～３回行っています。それが大変役に立っています。（福島県／Ｋ中学校）

編集後記

2014年度まで「小学版」「中学版」という形で全国の小・中学校および教育委員会などに提供していました『ＶＩＥＷ 21』ですが、2015年度からは、教育委員会の皆様により役立つ情報を提供できるよう「教育委員会版」として内容を刷新いたしました。教育改革が進み、さまざまな課題に直面する昨今において、ＩＣＴ化や英語教育など、最新の教育動向や先進事例をこれから数多く紹介していきたいと思います。引き続きご指導をよろしくお願いいたします。（岡本）

VIEW21 教育委員会版 2015 Vol.1　2015年6月26日発行／通巻第1号

発行人　山﨑昌樹
編集人　春名啓紀
発行所　（株）ベネッセコーポレーション
　　ベネッセ教育総合研究所
印刷製本　凸版印刷（株）
編集協力　（有）ペンダコ
執筆協力　二宮良太、中丸満
撮影協力　荒川潤、田中秀和、松原誠、ヤマグチイッキ

◎お問い合わせ先
フリーダイヤル 0120-350455
〒700-8686
岡山市北区南方3-7-17

©Benesse Corporation 2015